

## 横浜地方気象台における関東地震 100 年の普及啓発活動

Public Awareness Activities of the 100th Anniversary of the 1923 Great Kanto Earthquake at Yokohama  
Local Meteorological Office

赤石一英<sup>1</sup>, 井上卓<sup>2</sup>, 松井正人<sup>3</sup>, 藤田宗一<sup>3</sup>

Kazuhide AKAISHI<sup>1</sup>, Takashi INOUE<sup>2</sup>, Masato MATSUI<sup>3</sup>, and Souichi FUJITA<sup>3</sup>

(Received March 15, 2024; Accepted January 23, 2025)

### 1 はじめに

2023 年は関東地震から 100 年の節目にあたることから、横浜地方気象台では、この機会を利用して地震防災に関する積極的な普及啓発活動を展開した。今回の取り組みは、関係機関との連携をはじめ、量的にも種類についても横浜地方気象台としては過去に例のない取り組みであった。今後も兵庫県南部地震 30 年等、全国の気象官署で周年事業を企画、実施することが考えられる。そのため、今回の取り組みの記録を今後の地震防災に係る普及啓発業務の参考となるよう整理・記録することとした。

### 2 経緯\*

2022 年 4 月に横浜地方気象台長として横浜に赴任するタイミングで、名古屋大学名誉教授の福和伸夫先生（以下「福和先生」とする）と時事通信社の中川和之解説委員から、関東地震 100 年となるので、神奈川県での地震防災についての普及・啓発を頑張るようにとアドバイスをいただいた。関東地震は東京の大火災が知られるところであるが、神奈川県内では強い揺れや津波によって大きな被害が発生していたこと、そのことはあまり知られていないことなどを認識し、取り組みを進める必要があると理解した。

着任早々に翌年度（2023 年度）には関東地震 100 年となるので、積極的な広報活動を検討するよう指示したが、その時にはまだ切迫感はなく指示も具体性を欠いていたためか、検討は進まなかった。夏になり、翌年（2023 年）の「ぼうさいこくたい」が関東地震 100 年の節目として横浜で開催されることが明らかになり、急遽、職員を情報収集のために「ぼうさいこくたい（神戸）」へ派遣した。これが具体的な取り組みの第一歩となった。これ以降、「ぼうさいこくたい（横浜）」への対応を含めた関東地震 100 年への対応を具体的に進めた。

まず、関東地震 100 年への取り組みを横浜地方気象台あげでの取り組みとすることを明確にするために台内に検討体制を構築した。台内の広報委員長である次長を責任者とする検討委員会を立ち上げ、定期的に議論を重ねるとともに様々な取組みごとにサブ WG を立てて責任の所在を明確にするるとともに各 WG に実施内容に関する裁量権を与えて内容の検討を依頼した。

検討委員会では、取り組みのコンセプトを明確にするるとともに台内の一体感の醸成のためにキャッチコピーを検討した。台内で公募し、検討委員会での議論を経て、「あの日を忘れずに、その日に備える」を使うことになり、ホームページ（以下「HP」とする）をは

---

<sup>1</sup> 横浜地方気象台, Yokohama Local Meteorological Office

現所属: 情報基盤部情報通信基盤課システム運用室, Office of Computer Systems Operation

<sup>2</sup> 横浜地方気象台, Yokohama Local Meteorological Office

現所属: 気象研究所, Meteorological Research Institute

<sup>3</sup> 横浜地方気象台, Yokohama Local Meteorological Office

\* 赤石一英

じめ、さまざまな取り組みにおいて使われた。

具体的な取り組み内容については、まず、どのような取り組みを行うべきか議論された。一般的に実施されているような講演会のようなものについてはすぐに具体的な意見が出たが、100年に一回の大きな取り組みとして考えた時、もっと様々な取り組みがあるのではないかと議論を重ねた。横浜市に多く残る震災の遺構をめぐるツアーや気象台での特設展示、津波に関するワークショップなどについてのアイデアが提案された。

そこで取り組みとしては大きく3つのカテゴリでの取り組みを進めることとなった。一つ目は、講演会やパネルディスカッションのようなメインのイベント、二つ目として、震災遺構巡りのような体験型のイベント、三つ目として、横浜地方気象台の展示スペースを活用した特設展示である。

また、検討の途中で本庁でも関東地震100年への取り組みを進めているとの情報が入り、特設HPの開設などを中心に連携して進めていくこととなった。

それぞれのカテゴリでより具体的に検討を進めて、年度末には次のような企画案が策定された。

#### 全体企画案

##### 1. 展示関係

- ① 横浜地方気象台での特設展示
- ② 関係機関との連携した展示
- ③ 特設HPの開設（本庁HP連携）

##### 2. 体験型イベント

- ① 出前講座
- ② ワークショップ
- ③ 震災遺構巡りツアー

##### 3. パネルディスカッション

- ① 基調講演とパネルディスカッション

##### 4. その他

- ① 防災訓練
- ② リーフレット作成
- ③ 学校防災教育との連携

### 3 取り組みの概要\*

前章で示した全体企画案をもとに具体的な検討、関係機関との調整等を経て、結果的には、次のような取

り組みを実施した。

具体的な取り組みを実施するにあたっては、様々な検討を要し、課題を解決し、また反省もあった。今後の参考とするため、ここでは、それぞれの取り組みの経緯や検討内容等の概略を示す。

#### 3.1 展示関係

##### 3.1.1 横浜地方気象台での特設展示

###### ・経緯

今回の取り組みの中で最初に検討した場所。もともと新旧の庁舎の紹介など、一般向け展示スペースとなっていたので、これを関東地震の特設展示に模様替えることとした。

###### ・コンセプト

動線を配慮しつつ、地震に関すること、被害に関すること、備えに関することを伝えるものとする。特に揺れの被害が酷かったことを写真で伝える。写真だけではわからないことも多いので解説もつける。

###### ・実績等

正確な数ではないが、展示再開以降、当初は一日当たり数名程度の来場者数だったが、その後増えてきており、現在（2024年3月）では概ね10名以上の見学者が来ている。

###### ・実施にあたっての苦労

全体にコンテンツが不足していた。写真や地震のデータなど、本庁地震火山部や管区気象台（以下「本庁・管区」とする）からの支援に頼ることとなった。

###### ・感想・反省等

写真やデータを添える過程で職員自身にも新たな学びや発見があった。

写真の解説を音声ファイルにして、2次元バーコードで読みだして聞くことが可能なものを作ろうと考えていたが、実現していない。一度展示してしまうとその後の見直しや追加まで手が回らなくなった。

##### 3.1.2 関係機関との連携による展示

###### ・経緯

福和先生から公益社団法人 全国市有物件災害共済会防災専門図書館（以下「防災専門図書館」とする）のスタッフの方々をご紹介いただいた。横浜地方気象台としては展示のコンテンツ不足が補えること、図書館側としても周知広報に資することがあるというこ

\* 赤石一英

とでコラボ企画としてのサテライト展示が実現した。

・コンセプト

地震のこと、災害のことは気象台側で展示しているので、当時の世相を反映した展示や復興や復旧に関すること、備蓄などに関するコンテンツを図書館側で展示してもらおう。

・実施にあたっての苦勞

企画・検討・実施までの時間がとても短く、スケジュール的に厳しいものとなり、休日対応等とせざるを得ず、図書館側と気象台の職員に負担が生じた。

・感想・反省等

防災専門図書館との新たな関係構築が行えた。今後、別の展開も期待できる。

コンテンツの展示方法や内容について、時間をかけた検討ができなかった。期間中、展示内容に関する見直しや充実を図るところまでできなかった。

### 3.1.3 特設 HP の開設(本庁・管区と連携して HP 開設)

・経緯

各種の取り組みが計画された中で、予算の裏付けなどなくとも横浜地方気象台として確実に取り組めるものとして準備を進めた。まずは、震災遺構について職員が撮影した写真と、横浜地方気象台の紹介や地震防災の項目も追加して特設 HP へ掲載した。その後、本庁・管区との連携が進み、被害写真なども加えた。

・コンセプト

「横浜地方気象台周辺の痕跡」、「震災の状況」、「震源・規模・天気・津波」、「地震に備える」、「気象台の地震観測の紹介」、「気象台案内」、「今後開催する関連イベントの紹介」の 7 項目を伝える。内容により本庁の HP と相互リンクで紹介することとした。

・実績等

月間アクセス数は、2023 年 1 月から 2024 年 3 月までで、平均 1,000 アクセス、ピークは公開直後の 2023 年 1 月と 9 月 1 日直前の 2023 年 8 月で、それぞれ 2,000 アクセス、その後も現在 (2024 年 3 月) まで数 100 アクセスが継続されている。

・実施にあたっての苦勞

震災遺構の写真については、職員が撮影して回った。被害写真に写っている事業者に HP 公開を確認したところ断られてしまった。

・感想・反省等

新たな発見や知見を得ることができた。震災遺構な

どについての情報・知見が少なく、県内を広く網羅したものができなかった。事前の調査不足のため、公開後に追加して撮影、公開したものもあった。県内でも市内でももっと多くの場所を紹介できたはず。HP のデザインなどで工夫の余地があった気がする。

## 3.2 体験型イベント

### 3.2.1 出前講座

・経緯

普段から予報士会とも連携しつつ、多くの出前講座を実施している。特に「関東地震 100 年」を強く打ち出すためにどのような出前講座でも関東地震 100 年を訴えていくこととした。

・コンセプト

様々な出前講座で関東地震 100 年について言及、地震防災を盛り込む。また、依頼があったものについてはことわらない。本庁・管区の応援や予報士会の協力を得るなどして、とにかく実施する。

・実績等

出前講座の実績としては、前年比 200% (コロナ前比 150%) の 24 回の開催となった。

・実施にあたっての苦勞

地震防災に詳しくない職員が地震防災について説明することなどが難しいところもあり、対応する職員に偏りが出て苦勞することがあった。

・感想、反省等

実施する事に焦点を当て過ぎて、実施内容や方法などについての台内での確認や調整が十分できなかったところがある。

### 3.2.2 震災遺構巡りツアー(NPO との連携により実施)

・経緯

巡検などを参考に遺構を紹介するツアーを検討した。当初、職員から、募集や受付などの事務、ルート設定、ガイドまでを自ら行う提案があったが、遺構の説明やツアーの実施は気象台として負えるものではない。そのため、連携先を探していたところ、NPO 法人横浜シティガイド協会を紹介頂き、両者の合意により実施することとなった。

・コンセプト

遺構を見てもらうことで関東地震について知ってもらい、地震防災に興味を持ってもらう。その後、気象台で地震防災についての講演を行い、地震防災対策

についての知識を得てもらう。

・実績等

当日参加者は、定員 40 名のところ 44 名参加

取材は、TV 4 社ほか

で取り上げられた。

・実施にあたっての苦勞

NPO 法人との連携ということで考え方の整理や費用負担などの検討に時間を要した。本庁・管区に相談しながら、支援を受けて実施することができた。

・感想・反省等

連携施策とすることで募集、受付等をノウハウがある相手機関にて対応頂けた。当初、全体を自ら行うことを考えるなど、地方気象台の業務のあり方が整理できていなかった。実施に伴い、NPO との関係はとて良くなったが、気象台側の目的意識が希薄とならないよう意識することが重要と感じた。

### 3.2.3 気象台でのイベント実施（地震本部との連携）

#### 3.2.3.1 親と子の実験教室（ワークショップ）

・経緯

地震調査研究推進本部（以下「地震本部」とする）の政策委員長である福和先生に横浜地方気象台の取り組みについて相談していた中で、先生に実施協力をお願いしてご快諾いただいた。

・コンセプト

お菓子を使って、楽しく美味しく地震防災について考えてもらう、実験教室として子供向けのワークショップとした。

・実績等

当日参加者は、22 名（11 組）

取材は、TV 4 社、

で取り上げられた。

・実施にあたっての苦勞

ファシリテーターは福和先生にお願いできたので、実施内容については、苦勞はなく成功した。ただ、初めての文部科学省（以下「文科省」とする）との連携事例ということもあり、仕様書作成、業者調整などの事務仕事が大変であった。また、平日の実施としたためか、思った以上に集客に苦戦した。

・感想・反省等

福和先生による熟練の進行のもと、子供達が目を輝かせながら、プリンを使って学びそして食べている姿が印象的であった。

#### 3.2.3.2 地震津波ミニ講演会（“きみ”だけの防災ポーチを作ってみよう）

・経緯

地震本部との連携第 2 弾として企画した。当初は福和先生にお願いすることも考えたが、検討を進める中で将来につなげるためにも地元の研究者との連携を模索してみることとした。紆余曲折はあったものの横浜国立大学との連携が構築でき、同大台風科学技術研究センターのセンター長補佐である奥村政佳氏に講師をお願いすることとなった。

・コンセプト

体験型、児童・生徒を対象とするもので、楽しく地震防災が学べるものをキーワードに奥村講師と協議して、いつどこで発生するかわからない地震への備えの一つとして、日頃から持ち運びができる防災グッズを選び、それをまとめた「防災ポーチ」を実際に作成するワークショップとした。

・実績等

当日参加者は、37 名（19 組）

取材は、TV 2 社、新聞 2 社

で取り上げられた。

・実施にあたっての苦勞

年度内 2 度目ということもあり、概ね順調に準備はできた。防災ポーチに入れるものを百円ショップで揃えるなど、大変だが楽しい準備とすることができた。

・感想・反省等

前回の反省をもとに対象年齢層を上げて、子供を優先としつつも大人の参加も可とした。また、休日実施とした。そのため、募集期間が短かった割には集まったが、抽選とするほどではなかった。

### 3.3 防災フェアへの積極的参加

防災フェア等へは、地元の神奈川県、横浜市をはじめとして、相模原市、川崎市など多くの自治体へ協力して参加した。ここでは、一番大きなイベントであり、日程も重なった神奈川県と横浜市のイベントへの対応について記す。

#### 3.3.1 かながわ消防防災フェア

・経緯

「ぼうさいこくたい」への準備を進める中で、神奈川県としての防災フェアへの対応が明確となり、横浜

市のフェアと合わせて対応することとした。

・コンセプト

屋外ブースでの展示ではあったが、実際に見て、触って、考えてもらう展示を行うこととした。横浜市と同日となったため、横浜市は気象関係を展示し、神奈川県は地震関係の展示を行うこととした。

・実績等

当日イベントへの参加者は、主催者発表で 14,000 人  
気象台ブースへは、用意した資料の数から概ね 250 人くらいと考えられる。

・実施にあたっての苦労

展示ブースの検討などに時間はかかったが、それなりに良くできたと思われる。一番苦労したのは、二日間の実施日がとても暑く、その中で職員が無事にやり遂げたことだと考える。

・感想・反省等

ブース対応にあたっては、本庁・管区からも応援を頂くことで何とか対応できた。暑い中ではあったが、来場者からは概ね高評価を得ていたと感じた。

### 3.3.2 横浜防災フェア

・経緯

横浜地方気象台の関東地震 100 年イベントについて、横浜市の担当者との意見交換を行った際に、「横浜防災フェア」へ気象台が例年参加していないことが分かった。そのため、気象台も参加し、防災気象情報の広報活動を行うこととした。

・コンセプト

屋外ブースでの展示ではあったが、実際に見て、触って、考えてもらう展示とした。神奈川県と同日となったため、神奈川県は地震関係の展示を行い、横浜市は気象関係の展示を行うこととした。

・実績等

当日イベントへの参加者は、主催者発表で 72,000 人  
(1 日目 37,200 人、2 日目 34,800 人)

気象台ブースへは、用意した資料の数から概ね 700 (パンフ 450 部) 人くらいと考えられる。

・実施にあたっての苦労

展示ブースの検討などに時間はかかったが、それなりに良くできたと思われる。一番苦労したのは、二日間の実施日がとても暑く、その中で職員が無事にやり遂げたことだと考える。

・感想・反省等

ブース対応にあたっては、本庁・管区からも応援を頂くことで何とか対応できた。暑い中ではあったが、来場者からは概ね高評価を得ていたと感じた。

### 3.4 「ぼうさいこくたい」への積極的参加

・経緯

今回の関東地震 100 年イベントの中で中心的なものであり、内閣府が主催するもので事前に福和先生や中川解説委員からも積極的な対応を求められていた。そのため、前年開催地の神戸視察や、地元防災関係者の集まりである「かながわ人と智をつなぐ防災・減災ネットワーク」との連携など、時間と労力をかけて準備した。

・コンセプト

気象台単独で考えるのではなく、神奈川県での防災気象情報の責任者というスタンス（一参加者ではなく主催者側の認識）で、地元防災関係者と連携、本庁・管区との連携などを含めて、イベントが成功するよう積極的に対応・関与した。

・実績等

当日イベントへの参加者は、主催者発表で 16,000 人  
気象台ブースへは、用意した資料の数から概ね 450 (1 日目 250, 2 日目 200) 人くらいと考えられる。

・実施にあたっての苦労

事前に様々な会議や打ち合わせがあり、それらの対応に時間や労力が必要となった。事前情報などが少なく、前年度（神戸）への視察などを含め、情報収集に努めた。

・感想・反省等

一連のイベントを通して、事前に視察を行ったことで、対応する人員配置、終わりから逆算した展示品の手配など、準備段階から大きな成果があった。

スタッフの一体感醸成と来場者へのアピールのため、オリジナルのスタッフ T シャツを作成した。

配布するパンフレットなどについて、事前の他のイベントを含め予想以上に必要となり、他官署からかき集めて対応することとなった。

	令和4年度							令和5年度										
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
<b>□ 展示関係</b>																		
気象台での特設展示	・企画開始		・準備開始・仮配器・福和先生の助言					・一部改修		・9/1一般公開								
防災専門図書館との連携による展示								・防災専門図書館との打合せ										
特設HPの開設	・企画開始		・1/4公開															
<b>□ 体験型イベント</b>																		
出前講座(主なもの)	・2/23栗野市防災講演会							・6/25小田原市防災講演会		・8/20大磯郷土資料館講演会		・9/4横浜市磯子区防災講演会		・2/18伊勢原市防災講演会 ・3/5蓮子市民防災セミナー				
震災遺構巡りツアー	・企画開始		・横浜シティガイド協会との調整開始 ・6/1第1回					・5/8参加募集開始		・企画開始 ・2/13参加募集開始 ・3/5第2回								
親子の地震実験教室 ・地震津波ミニ講演会 ～きみだけの防災ポスターを作る～	・企画開始							・実施概要決定		・8/4参加募集開始		・8/24親子の地震実験教室		・企画開始 ・実施概要決定 ・2/13参加募集開始 ・3/3地震津波ミニ講演会				
<b>□ 防災フェア・防災訓練</b>																		
かながわ消防防災フェア	・管区への展示機材借用依頼							・9/2、3かながわ消防防災フェア										
横浜防災フェア	・6/19市から依頼							・9/2、3横浜防災フェア										
ぼうさいこくたい	・6/1横浜市避難ナビへの「キキクル」追加							・9/17、18ぼうさいこくたい										
その他								・8/19川崎市中原区防災訓練		・11/12茅ヶ崎市防災フェスティバル		・9/1九都県市合同防災訓練 ・11/25川崎市中原区防災訓練 ・9/3川崎市多摩区防災訓練 ・10/15ピクレスキューかながわ						
<b>□ 各種打合せ等</b>																		
台内ワーキンググループ会合	・10/12 ①		・12/7 ⑤		・3/10 ⑨		・5/18 ⑬		・7/18 ⑮									
本庁管区横浜3者打合せ	・11/9 ②		・12/22 ⑦		・3/28 ⑩		・6/15 ⑭											
	・11/17 ③		・1/17 ⑥		・4/7 ⑪													
本庁管区横浜3者打合せ	・11/2 ①		・12/7 ④		・4/15 ⑦		・5/26 ⑩		・7/20 ⑬									
	・11/9 ②		・12/23 ⑤		・4/24 ⑧		・6/7 ⑪		・8/8 ⑭									
	・11/17 ③		・1/17 ⑥		・5/18 ⑨		・6/29 ⑫		・9/25 ⑰									

図 1 関東地震 100 年にかかる取組実績

### 3.5 全体の作業スケジュール

最後に、2023 年度末までの各種取組の実施時期等をまとめた資料を掲載する(図 1)。

## 4 取り組みの詳細

以下に特に注力した取り組みについて、主体的に担当した職員の感想を交えて詳細に説明する。

### 4.1 ぼうさいこくたい\*

2022 年 9 月、「ぼうさいこくたい 2023」が神奈川県で開催されるとの情報があつた。2022 年に開催された神戸へ、気象台の対応、会場の様子などの情報収集をするため、WG の職員を派遣し帰台後台内共有した。

イベント参加の手続等に関する情報収集は、台長が会員となっている「かながわ人と智をつなぐ防災・減災ネットワーク」に関係官が同行し、主体となる神奈川県や、関係団体と顔の見える関係を構築して行っていった。

それと「ぼうさいこくたい 2023」の企画書の作成を同時進行で行った。出展の趣旨、出展内容、展示内容、それを実現するための対応人員と時間のおおよその割振りを考えた。これを作成するのに視察がずいぶん役立ったことは述べるまでもない。

関東地震では、東京都内の地震による火災被害がクローズアップされることが多いが、震源に近い神奈川県内では、火災や地震動による建物の倒壊、土砂災害、津波などで、東京より大きな被害が生じている。このことを当時の土砂災害写真パネル等(過去)を展示した上で、気象台と県が共同発表している「土砂災害警戒情報」等の基準の変更運用や、台風・大雨による災害の危険度の地理的な広がりを見ることが出来る「キキクル」等の防災気象情報説明パネル(現在)について気象台職員が解説する内容とした。イベントには全国から参加者が集まることから、老若男女問わず全世代を対象とした。



写真 1 横浜地方気象台のブース

出展内容については、ブースを割り当ててもらい開

\* 藤田宗一

催時間をフルに活用できる「プレゼンテーション」を企画し台内の了解を得た。

ぼうさいこくたいの出展に関しては、まず選考されなければ実現できない。4月28日出展申込し、6月10日の審査結果通知までは、出展を前提に準備を進めた。幸い出展の通知があり、6月18日には出展の意思確認、7月11日には出展者が公式HP上に掲載する「マイページ」を作成し報告している。8月に入り、電源・wifi・搬入出車等各種申請書類の提出や会場の下見を行った。これまでの間に「現地情報共有・連携会議」を4回行って、他の出展者との情報共有や共同出展の可否を模索している。9月に入ると、電源やwifi利用、車両証等の最終確認があった。

気象台として展示の準備も並行的に行っている。配布パンフレット、展示パネル作成、ビデオ上映用ファイルの作成、スタッフの名刺に至るまで、準備品のチェックリストを作成し、漏れの無いように細心の注意を払った。また、当日は意気込みを形で表すべく、特注で作成した横浜地方気象台オリジナルTシャツを着用し、参加者のみならず、関係者一丸となってイベントを盛り上げた。



写真2 オリジナルTシャツで解説する職員

展示ブースではパンフレットを2日間で300部用意していた。会場の横浜国大は交通の便があまりよくないが予想以上の人出となり、1日目でなんと250部が捌け、2日目に急遽200部を追加で用意。想定を大幅に上回る450部を手渡した。家族連れや受け取り辞退された方などもおり、実際はこの1.5倍くらいの来場があったと思う。

一連のイベントを通して、事前に視察を行ったこと

で、対応する人員配置計画や展示品を、終わりから逆算した手配など、準備段階から大きな成果があった。

ただ配布するパンフレットについては、直前のイベントでも想定以上の部数が出たことも重なり、今回自前では必要数が確保できず、急遽余裕のある他官署からかき集めて対応した。パンフレットの調達や配布のあり方なども検討していかなければならないと感じた。

#### 4.2 横浜防災フェア\*

横浜防災フェアには、これまで長らく気象台の参加が無かった。「関東地震100年イベント」の連携を模索するため、横浜市危機管理室の担当者と打合せをする中で、今年度参加することが実現した。

前年まではコロナ禍のため、市役所のエントランスホールで規模を縮小してこのイベントを行っていた。コロナ感染症の5類移行に伴って、今年度は赤レンガ倉庫広場で大々的に行った。また、関東地震から100年と言うこともあり、横浜市が力を注ぐイベントだと聞いていた。

担当者同士の打合せを重ね、6月19日に横浜市長から気象台長宛てに正式に参加依頼があった。

横浜防災フェアは9月2日と3日の2日間である。同日には気象台も参加する神奈川県防災イベント(4.5節参照)もある。神奈川県は関東地震100年の地震に特化した催しを行うので、両方に参加する気象台に対する気遣いからか、横浜市への出展は特に地震を意識しなくても良いと言う。とは言っても震災100年の防災フェアで地震の話をしなわけにはいかないので、出展企画には頭を悩ませた。

実は横浜防災フェアの話と並行して、横浜市からは「横浜市避難ナビ」の登録者が伸び悩んでいること、気象台からは「キキクル」の知名度の上りが鈍いことを共有していた。私も横浜市避難ナビの登録者であったので話に花が咲いた。

「市の避難情報、気象台の注警報が一目で確認出来て優れものですね。欲を言えば、キキクルがリンクされていれば避難指示の時、安全に避難する手助けとなりますね。是非組み込んでいただければより良いアプリになります。」と意見を述べた。

これが頭の片隅にあったかどうかはわからないが、

\*藤田宗一

数日後に担当係長から「気象庁のキキクルを、横浜市避難ナビに組み込みたい。ついては、名刺にあった気象庁のマスコットキャラクター「はれるん」をリンクボタンとしてトップ画面に登場させて良いか」との問い合わせがありプロジェクトが開始された。そして、「はれるん」利用の確認やアプリ改修作業を進め、2023年6月1日の気象記念日に、アプリの中で「はれるん」がキキクルのページに案内してくれることが実現した。このことがあって気象台出展ブースの企画は固まった。

大きな地震があったとき、警報注意報の運用基準を下げて、少しの雨でも土砂災害の危険性をお知らせする。それを気象災害の危険度、地理的な広がりを見視的・直観的に知ることができる「キキクル」にも反映される事を気象台職員が解説する。そして、横浜市避難ナビとキキクルの融合により、危険度と避難所等を安全に直結させたアイテムを紹介していく構想とした。

また、県のイベントと差別化するようにし、関東地震100年の詳細な展示や解説は県の出展ブースを紹介することで、人の流れを作るとともに、相互の普及啓発を行えるようにした。



写真3 横浜地方気象台のブース

気象台のブースでは、関東地震の際の土砂災害写真、土砂災害警戒情報運用解説ポスター、観測機器紹介ポスター、風の強さ雨の降り方ポスター、そして横浜市避難ナビとキキクルを組み合わせた独自のポスターなどの展示、防災ビデオ上映、雲発生実験コーナー、観測機器展示、パンフレットの配布を行った。

職員は来訪者への解説や実験の手伝いをした。場所が赤レンガ倉庫広場であるため来訪者が多く、熱心な

質問も多く寄せられた。特に水を使った雨量計の仕組みには、暑さも手伝って沢山の子供達が興味を示してくれた。



写真4 実験は行列ができる程の大盛況ぶり

イベントの2日間は、炎天下厳しい暑さの中での対応となった。あらかじめ対応者のタイムスケジュールを作成し、無理なく実施できると想定していたが、暑さによる発汗で体力が奪われ、一日が終わるとへとへとになった。近年続いている暑さを考慮した人員配置やスケジュールを立てなければならぬと反省した。水分を十分に準備していたことで、熱中症になるものがいなかったのが幸이었다。

#### 4.3 震災遺構巡りツアー\*

関東地震をテーマとした震災遺構巡りツアー、企画のチーフを任されたものの、当初具体的なイメージをつかめず企画書の作成に戸惑う。その時、台長が参加する「かながわ人と智をつなぐ防災・減災ネットワーク」の会員から、「横浜市内を街歩きガイドする NPO 法人がある」と紹介を受けた。それが「NPO 法人横浜シティガイド協会（以下「ガイド協会」とする）」であった。震災遺構巡りツアーは遺構を巡る街歩きが主な目的であり、それに関連した講演を気象台で行う。なので、主催はガイド協会とし、気象台は後援とした。打合せを重ね、関東地震で被災した先人が、どのような形で後世に被害や教訓を伝えようとしたのかを、今も市内の所々に残る大震災の遺構を巡り事実を知ることにより、今の我々が大地震に対して、何をどのように備えるかを学ぶ事を目的とした。

約1カ月前から参加募集の広告を相互のHPに掲載し、ガイド協会ではチラシの配布を行った。震災100

\*藤田宗一

年の特別企画ということもあるのか、あつという間に募集定員に達したことに驚くとともに、人々の関心の高さを実感した。

震災遺構巡りツアーで気象台が中心となって行ったのは「ミニ講座」である。講座の内容は関東地震 100 年にちなみ、題目は「地震に備える」。100 年前の地震の概要と被害の事実を伝え、現代の身を守る地震情報の仕組みと活用について講義した。午前午後と 2 回の講演とも、参加者から時間を大幅に超過する質問が寄せられる程の盛況ぶりであり、進行する私も関心の高さを大変うれしく思うとともに、こうした情報を伝えることの重要性を改めて感じた。

気象台に与えられた時間は 1 時間。その中に案内、ミニ講座、特設展示会場見学、観測露場見学を盛り込まなければならない。頭の中で人の動きをシミュレーションし、ガイド協会からバトンタッチされた後のスケジュールを分単位で考えた。企画した内容や当日の役割分担、スケジュールの共有は時間の関係からメールで行ったが、担当者とは実際に顔を突き合わせた打合せを持った方が考えをスムーズに伝えられ、当日実行できたのかもしれない。

また、担当者が急遽交替しても良いように、講座はもちろん、案内や見学で話す内容まで、誰でも対応できる様に原稿を作成したのは良かったと思う。

ただ、実際に原稿を読み上げる場面となったとき、見学者の反応は薄いように感じた。本番までに 1 回だけリハーサルを設けたが、数回リハーサルを行えば良かったと反省する。

震災遺構巡りツアーを無事に終えて、職員にアンケートを実施した。

開催時期や回数、スタッフの人員と配置、講演の内容、見学等々様々な意見が寄せられ、比較的前向きで次回に期待する声が多く見られた。

令和 6 年能登半島地震で甚大な被害を目の当たりにした。関東地震から 100 年経った今、あの日を忘れず、いつどこで起きるかわからない災害（その日）に備えて次の計画を進めている。

#### 4.4 特設 HP（関東地震から 100 年）\*

関東地震 100 年に向けた取り組みの機運が高まるなか、少ない経費で短期間のうちに効果的に普及啓発を

進める手段として、横浜地方気象台 HP に地震関連の資料を掲載することとし、2022 年 10 月末に作業を開始した。

掲載資料として最初に思い浮かぶのが震災時の気象資料（当時は横浜地方気象台の前身である神奈川県測候所）であるが、残念なことに関東地震の際に測候所とともに焼失しており観測資料を紹介することができない。そこで、改めて気象台の周囲を見渡すと所々に震災遺構が現存していることが判り、震災遺構を紹介することで後世に関東地震の被害を伝え、来るべき次の地震への備えを啓発することにした。また、現在の横浜地方気象台の庁舎（第一庁舎）は関東地震の 4 年後に米海軍病院跡地に建てられており、敷地内にも震災当時の遺構が残っていることから、気象台を紹介する資料も掲載することとした。さらに、『あの日を忘れずに、その日に備える』のテーマのもと、地震の被害に備える資料や気象台における地震観測などの資料を追加し、最終的には「横浜地方気象台周辺の痕跡」、「震災の状況」、「震源・規模・天気・津波」、「地震に備える」、「気象台の地震観測の紹介」、「気象台案内」、「今後開催する関連イベントの紹介」の 7 つで関東地震 100 年特設ページを構成し、2023 年 1 月 4 日に公開した。

また、肝心の掲載資料についても、特設ページの構成と同時に並行で検索・収集作業にあたった。幸いにも横浜地方気象台での検討と時を同じくして、気象庁地震火山部でも『関東大震災から 100 年』特設サイトの検討が進められており、東京管区気象台並びに横浜地方気象台に呼びかけがあった。これをきっかけとして、地震火山部が所有している当時の記録写真を利用できることとなり、横浜地方気象台の特設ページでは神奈川県内で発生した被害を種類ごと（強震動、土砂災害、火災、地盤の隆起）に分類して掲載することにした。

一般に関東大震災というと東京の大規模火災が知られているが、神奈川県は震源に近かったことから強震動による被害も多く発生しており、強震動の被害写真を多く紹介することにした（もちろん、横浜では火災による被害も発生しており、気象庁図書館や防災専門図書館に延焼経路の調査資料が残っている）。また、作業を進めるうち、地震火山部が所有している被害写

\*井上卓

真の中に神奈川県西部の某店舗が看板の文字が読み取れる形で写っているものがあり、しかもその店舗は現存していることがわかった。いくら 100 年前のこととはいえ HP で掲載するので先方に掲載の承諾を得る必要があるだろうということになった。連絡を取るにあたり、「現在も繁盛しているお店のようなので問題はないだろう」と甘く考えていたが、先方からは「店が傾いているというイメージを思い浮かべる写真は縁起が悪いので載せないで欲しい」との返事であった。このような受け止め方もあるのだと感じたと同時に、勇み足で確認せずに掲載してクレームが届いていたことを想像すると、事前に確認しておいてよかったと痛感したところである。

気象台周辺の痕跡については、既存の資料がないことから「気象台周辺を散策しながら震災遺構を巡る」という形で職員が実際に気象台周辺の遺構を訪ね歩き、写真撮影をして掲載資料を集めて回った。この結果、横浜市中区を中心とする狭い範囲の写真を多く紹介することとなり、短期間で気象台周辺の震災遺構を見て回る内容とすることができた。実は、この中区への集中と巡り易さが幸いし、別途、後援した「震災遺構巡りツアー」のコースを設定する際の参考になった。

横浜市以外の場所としては、関東地震の際に土砂災害で川がせき止められて作られた「震生湖」や相模原市緑区鳥屋（とや）地区で発生した山津波の土砂が堆積した「地震峠」を紹介し、一部ではあるが県内に幅を広げることができた。余談ではあるが「地震峠」については地元高校生が漫画化して後世に伝承する取り組みを行っている。

この他、横浜地方気象台での地震観測の歴史は濱田信生氏の記録に基づき年表を作成した。残念ながら当時の地震計の写真などは横浜には残っていなかったことから本庁の資料を使用している。また、横浜地方気象台の第一庁舎は震災復興期の中規模公共建築を代表するものであること、意匠的にも時代の最先端を行くモダンな存在であったこと、現存する庁舎としては珍しく内外ともに創建当初の姿をよくとどめていること等の理由から、擁壁とともに横浜市有形文化財に登録されており、関東地震の紹介に併せて気象台の建物や観測装置類を紹介している。ちなみに気象台紹

介のページに掲載した紹介動画は永井次長（当時）が Web お天気フェア開催の際に作成したファイルを使用している。

10 月末の作業開始から 2 か月間で公開までこぎ着けたが、入手できた既存資料の有効活用や県立図書館など横浜市内の施設を中心に調査にあたったことで実現できたのではないかと感じている。半面、小田原市根府川駅付近で発生した土石流など横浜市から離れた場所で発生した被害については既存写真に頼るのみで調査不足の感は否めない。

いつ来るかわからない地震に対して普及啓発を図るためにも、また、時とともに散逸しがちな資料を保全するためにも、資料収集と整理は継続していきたいと思うことしきりである。

#### 4.5 かながわ消防防災フェア\*

かながわ消防防災フェアは、神奈川県の間東大震災 100 年事業の一つとして、国指定重要文化財となっている神奈川県庁の本庁舎（通称「キングの塔」）を活用し、9 月 2 日（土）・3 日（日）の 2 日間に県庁本庁舎と県庁前を通っている日本大通り、そして海側の象の鼻パークで開催されたイベントである。横浜地方気象台では、「かながわ消防防災フェア」の企画立案段階から神奈川県くらし安全防災局と調整を重ね、早い段階で同フェアでのブース展示が決まっていた。

展示内容としては、赤レンガ倉庫広場で「横浜防災フェア」も同日開催されることから、「かながわ消防防災フェア」では『関東地震の概要を説明するとともに、気象庁が発表する地震・津波に関する防災情報の解説を行い、今後に備える地震防災の普及啓発を図る』ことを目的とした内容とすることとした。具体的には、「地震がなぜ起こるのか」「震度計を使って震度の階級を知ってもらう」「液状化の起こり方」の 3 つについてパネルと展示機材を用いて説明した。このうち、計測震度計を使った実験では普段あまり見ることができない装置というもの珍しさもあって好評であり、なかには震度 7 を出すまで揺らし続ける子供もいた。また、液状化実験装置を使った説明では、振動を与えると地面（砂）の下から水が湧き出すことに驚いた方も多く、子供だけではなく保護者の方も興味津々の様子であった。特に保護者の方は東日本大震災の記憶が

\*井上卓

強く残っていたのか「3.11 の時は千葉県浦安市で液状化現象が起きましたよね？」という質問もあった。このような時には、「実はこのフェアの会場となっている日本大道り駅周辺も埋立地で、強い地震が起きれば液状化の可能性もあるんですよ。」と伝えると、驚かれた様子で「この周辺が埋立地だとは初めて知りました」という方も多く見受けられた。



写真 5 地震発生説明器を使って海溝型地震の仕組みを学ぶ小学生

気象台のブース見学者は 1 時間で平均 10 名くらいであったが、直ぐ近くで行われた消防車の体験乗車といった集客力のあるイベントの後には一気に混雑することもあり、見学者数の時間変動が大きかったという印象である。

展示機材については 2023 年 4 月早々に東京管区気象台が広報用機材として持っている「地震発生説明器」「液状化実験装置」「計測震度計」の 3 つを予約した。ただ、機材を予約した時点では気象台の展示スペースの広さはもちろんのこと展示場所も確定しておらず、さらに、気象台としても展示コンセプトの詳細を決めかねている状況でもあった。このような中、関東地震 100 年という大テーマが設定されているので地震に関する展示機材は外せないだろうし、万が一かながわ消防防災フェアで使わなくても横浜市の方で使うこともできるだろう、という見立てと、機材の数は限られており 9 月 1 日前後は希望者が多いことが想像されたこと、さらにはパネル展示とパンフレット等の資料配布だけではインパクトに乏しい展示になってしまう

という不安感から、多少フライング気味ではあったが器材確保を行ったというのが本音のところである。幸いにも、神奈川県のご配慮のもと用意した機材全てを展示できるスペースが割り当てられ、子供から大人まで幅広く関心を持ってもらうことができた。やはり、早めの計画と準備は大切ということを再認識したところである。

ところで、このように確保した展示機材のうち地震発生説明器と液状化実験装置は想像がついていたが、実のところ計測震度計はどんな機材が届くのか見当がついていなかった。実際に届いた計測震度計は黒い専用のケースに収められており、一人では持ち上げられないほどの重さであった。そこで課題となったのが「どのようにして会場まで運搬・設置するのか」「夜間は展示機材を何処に保管するのか」の 2 点であった。当初の想定では官用車 1 台を使って横浜防災フェアの機材も含めてピストン輸送することを考えていたのであるが、計測震度計があまりに大きく重く、交通規制の都合上、会場での積み下ろしに許される時間も限られていることから、1 日目終了後に気象台まで持ち帰ることは難しくなった。このため、新たにレンタカー（商用バン）を 1 台用意して、1 日目の積み下ろし作業が不要になるよう対応することとした。

このように、準備から出展を終えるまでの間には数々の苦労や課題もあったが、本庁・管区の皆様から支援いただき、気象台ブースを訪れていただいた方々に少しでも地震に対する備えの必要性を伝えることができたことは、有意義で大きな経験になった。

#### 4.6 気象台での特設展示\*

2022 年に、関東地震 100 年に関する普及啓発、広報等の内容検討が始まった当初から、台内における展示については検討され、もともと一般向けに公開されていた展示室（旧所長室）に「特設コーナー」を設置することとして「特設展示」の企画は開始された。

基本コンセプトとしては、関東地震の観測記録や被害写真等により「過去」を知ってもらい、「現在」の地震や津波に関する情報、「未来」として今後の備え等を説明し、過去と未来をつなぐこととした。

実質的な検討は 2022 年の 12 月から行われ、検討委員会 WG、展示チームを中心に急ピッチで行われ、月

\*松井正人

1 回程度の打ち合わせを持ちつつ、展示資料の収集・作成、展示のための資材等の調達を経て、2022 年度中に「特設展示室」として旧来の展示室の様態替えを実施した。特設展示のテーマについても、関東地震 100 年の取り組みにかかる全体テーマと併せて「あの日を忘れず、その日に備える」を採用し、概ねの展示をまとめることができた。

展示としてはまとめたものの、コロナ禍の影響はまだ残っている状態であり、地方公共団体や関係機関の挨拶や見学等があった際に紹介する程度で、一般向けの公開は行わず、2023 年度に引き継がれた。

年度が変わり新メンバーとなったこともあり、なかなか具体的な対応ができない中、5 月に入って、台長が福和先生に相談し、展示の状況を見ていただきアドバイスをいただいた。

被害場所と地図の重ね合わせや、関東大震災以外の東南海地震などの神奈川県への影響などの展示に関する助言のほか、台内の躯体からロープを垂らしてブランコを作り、揺れの周期等について子供に体感してもらうことなど、かなり幅広い意見と共に詳細は別に譲るが、地震本部との連携などについても提案をいただいた。

福和先生からアドバイスを頂いたことを契機として、名古屋大学の減災館を視察し、得られた知見を特設展示に活かすことや、展示への支援等の連携も模索して出張の企画も行ったが、結果として他の業務やイベント等の対応もあり実現させることができなかったことは、自身の力不足も含めて残念であった。

若干話が逸れたが、2023 年度に入ってから展示の拡充の一つとして「展示内容をわかりやすくする」ことがあり、例えば、地震計の波形であれば、どこから地震波を観測しているのか印をつけるといった単純なことも含め、一般の人が見てもわかりやすい展示を目指したが、被害写真が実際にどういう状況なのか、どのような被害なのか、そもそも、どの場所なのか、といった補足する情報の作成がなかなか進まなかった。この点については、神奈川県内の震災の写真資料等の収集や、震災遺構の街歩きにより実際に現状を確認し、「横浜古壁ウォッチング」という Web サイトを通じて情報発信している鈴木広さんにも、気象台を訪ねていただき、ご意見や助言等をいただいたが、なかなか思い通りにまとめることができなかった。

結果として、補足する情報を最低限に絞り、写真が

どの市町村で撮影されたものなのか、その市町村ではどのような震災被害があったのかを整理し、その上で、分かっている範囲でどのような被害を写した写真であるのかを解説する補足資料を作成し、一般公開の 2023 年 9 月 1 日までに全ての写真への補足を完了させた。



写真 6 写真展示に補足説明を付けた様子

なお、一般公開に向けてはもう一つ、防災専門図書館と連携した展示が設置されたことから、全体的な動線と展示内容を見直し、展示の配置換えも実施した。

一般公開後に設置した感想ノートに記入された感想からは、A2 サイズ程度に引き伸ばされた被害写真についてのコメントが多く、その内容は、改めて大きな被害であったことを認識した、被害を受けていることを初めて認識したなど様々であるが、過去の大きな地震とその被害を知る、ことができる展示にできたと感じており、尽力した多くの職員、助言や支援頂いた方々に感謝したい。もちろん、「備える」としても、備えが必要であると認識したとか、気象台が発表する情報も理解できた、というコメントがあることも補足しておく。

今回の特設展示については、2022 年度末、そして、9 月 1 日の一般公開と、いくつかのポイントとなる段階があったが、それぞれにおいて、その時にできることを行い、あとは、随時内容の更新や拡充をすることとして進めていた。しかし、実際にはそのポイントが近づく段階において成果は出すものの、特に写真や解説の追加などをはじめとする内容拡充については十分に対応できなかった。途中、若手中心にリニューアル計画の検討も進めたが、担当した職員が、科学館や博物館などの専門の施設とまでいかないまでも、高いレベルのものを目指しすぎた部分もあったと感じており、検討結果も十分に反映させてあげることができ

なかった。改めて考えると、関東地震から 100 年として良いものを作らなければならないと、潜在的なプレッシャーがあったのかもしれない。



写真7 展示室全景

横浜地方気象台は、従来から台内に展示スペースを持ち、庁舎自体が横浜市の文化財に指定される歴史ある建物であり、さらに観光客が気軽に立ち寄る立地という強みもある。これらをもっと活かしていくためにも、特設展示の企画・検討、公開で得られた経験をふまえ、もう少し地に足をつけた形で、今できることと、いつか実現したいことをそれぞれ考えながら、残り期間の関東地震 100 年特設展示の拡充、そして、その後の展示等を改めて検討していくこととした。

#### 4.7 防災専門図書館との連携による展示\*

振り返れば、2023 年 7 月某日、これから空いているかと台長に問われたところから、私の防災専門図書館との連携はスタート。その日のうちに、気象台の展示の関係で相談していた福和先生からの紹介・提案で、防災専門図書館においてスタッフの方々と顔合わせし、図書館内の蔵書や展示の説明を受けるとともに、今後の連携等に関する相談が行われた。

話題は関東地震から 100 年の話が中心となり、関東震災全地域鳥瞰図絵（大阪朝日新聞が震災の約 1 年後に新聞付録して発行）など、現在の連携した展示でも扱われている素材や、復興、災害への備えなど、気象台が得意とはしていない分野の展示などについて意見が交わされ、詳細は気象台の現場を見ていただきつつ詰めることとし、初日の会合は終了した。

\*松井正人



写真8 関東震災全地域鳥瞰図絵を活用した展示

1 週間後の日曜日、改めて気象台において防災専門図書館のスタッフとの打ち合わせが行われた。私は残念ながら所用があり参加できなかったが、台長が対応し、気象台の 1 階エレベーターホールを兼ねるギャラリースペースを活用し、関東震災全地域鳥瞰図絵などを用いた関東大震災の様子展示、震災の復興後の展示、防災専門図書館の蔵書の紹介の展示など、防災専門図書館のサテライト展示を行う連携の方向性が決定された。

決定された方向性を受けて、さらに後日、気象台側の私が展示担当職員と共に改めて防災専門図書館を訪ね、気象台の関東地震 100 年の特設展示と連携する共通テーマ「関東大震災から 100 年 知る・学ぶ・備える」を決定した。さらに、展示内容等に関して相談し展示の具体等についてまとめた。

全体の構想がまとまったところで、気象台施設内に防災専門図書館のサテライト展示を構築することから、本庁・管区にも事前の説明や報告を行うなどの調整も実施した。

展示の設置は、8 月 24 日にイベント「親と子の実験教室」の実施が決定していたことから、その前の週末に行うこととし、防災専門図書館側の都合もあり、8 月 19 日土曜日に決定。週休日ということもあり、気象台からは私 1 名が作業兼立会者として対応し、防災専門図書館のスタッフ 2 名と共に設置作業を行うこととなった。展示場所は、台内は一般公開を行うことを前提とした設備として、展示用のケースやスポット照明が設置してあることから、防災専門図書館のスタッフが持ち込んだ資料や素材等を仮置きしながら微調整し、比較的スムーズに進めることができた。

最も大変だったのは、气象台に設置してある強化ガラスの展示スペース部分の事前準備で、強化ガラスの背面が窓となっていることから外光が入るため、黒模造紙を貼り付けて遮光することとしていたが、古い庁舎のホールのため空調がなく、しかも、わりと高さがあるために脚立を使った高所での作業となり、高温の中で汗をかきながらのかなりの重労働となったことである。この作業の話は台内でもあまりしていないが、恥ずかしながら、触れた部分に汗が滲む部分があったことをお許しいただきたい。黒色の模造紙であることから、少なくとも現状では見た目にはわからないことが幸いである。

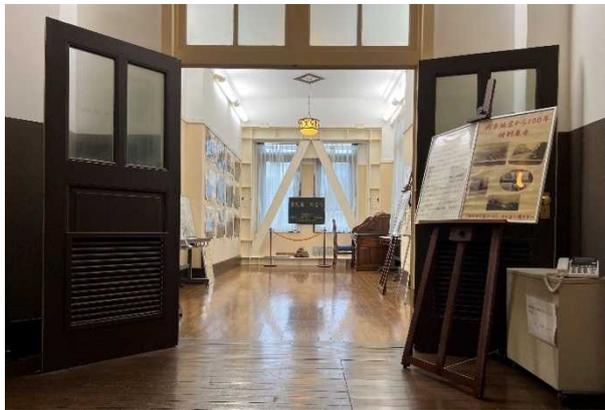


写真 9 サテライト展示全景

さて、設置終了後、初の公開となったのは「親子の実験教室」の参加者むけの台内見学で、一般公開は、9月1日の台内展示の公開再開に併せて開始した。サテライト展示の公開は台内の特設展示と併せて2024年の9月までを予定としている。

防災専門図書館との連携やサテライト展示については、関東大震災の様子がよく分かったという声や、100円ショップで揃えられる非常食の展示などに勉強となったとの声もあった。气象台とのコラボレーションとして、气象台のコンテンツも含む映像コンテンツ公開を企画するも実現出来なかったが、台内展示の充実という点においては効果があったと手応えを感じている。

私は、企画段階から積極的に関与し、防災専門図書館職員の方々との顔の見える関係を構築できた。今後の連携施策についても改めて検討・相談していきたいと考えている。

一方で、今回のコラボレーションしたコンテンツの

公開以外に、防災専門図書館のスタッフの知見を活用した台内展示の説明や、図書館の蔵書や資料等を活用した展示内容等の充実も、連携の効果として期待していたところであるが、ほぼ進展しないままとなってしまった。他の取り組みにも言えることだが、もっと多くの職員とも相談し、台内全体が連携した取り組みとすることができれば、違った結果があったかもしれないと考える。

#### 4.8 親と子の地震実験教室(地震本部との連携①)\*

台内展示に関する福和先生からの多数のアドバイスには展示物や実験装置の設置等も含まれていて、機材等の貸し出しといった話も出る中、福和先生から「气象台お金ないよね」との一言から、この企画への関わりはスタートした。

地震本部の政策委員長も努めている福和先生から、同本部が推進を計画している地方における周知広報活動について、2023年度から各気象官署と連携して取り組むこととして調整を開始しており、予算も確保している。まだ、連携する場所、气象台は確定していないことから、関東地震の震源地のある県に所在し、観光地にある立地や横浜市の歴史的建造物にも指定されていることなど、横浜地方气象台と連携するのは適当。連携した取り組みに絡めて、その後も使えるコンテンツを制作したり設置したりすると良い。として、その場で地震本部の事務局でもある文科省の担当者に電話して調整され、事実上その場で地震本部との連携が決定した瞬間であった。

文科省と福和先生が話している横で、台長は本庁地震火山部に電話して状況を説明、地震本部との連携の話を受託して問題ないか調整が行われ、その現場に立ち会った多くの職員は、ハイテンポに調整が進むことへの驚きと、本当に実行するのか、できるのか、との疑念もあったと思うが、このように話がまとまっていく経過を直に見聞きする機会は少なく、貴重な体験を得る機会となったと思われる。

その後は、担当レベルで文科省や本庁とも打ち合わせを持ちつつ企画案を検討した。5月下旬には横浜地方气象台においてサイエンスカフェ形式の講義と、関東地震から100年の特設展示など、台内見学を組み合わせたイベントを夏休みの時期に実施することで関係者と調整した。その後としては、福和先生にご相談

\*松井正人

したご縁もあり名古屋大学減災館への視察計画も立て、台内展示の充実と合わせ地震本部と連携した各種強化の検討もしていたが、出水期に入って大雨等のイベントがあったことや、関東地震 100 年関連で各種イベント対応が始まっていたことから、台内で十分なリソースを確保できず、名古屋大学減災館への視察もできずに検討が深まらない状況が 7 月まで続いた。

7 月に入り、改めて企画を整理して台内対応メンバーを集めて検討等を再開した。講義部分はこれまでの相談の流れで福和先生にお願いすることとし、内容は小学生を対象にお菓子を使った地震実験など行うこと、併せて台内の見学ツアーを気象台職員により実施すること、先生のご都合から日程も 8 月 24 日に実施することが決定した。

これにより企画全体は概ねまとまったが、地震本部との連携として、地震本部内での説明と了解、運営等に関する外部委託やコンテンツの作成や準備等をどこまで実施することができるのか、といった検討は進んでおらず、週内には地震本部や文科省内で説明できる資料を作成したい、明日までに仕様書案が欲しい、といった厳しい要求にも応え、一つ一つ段階を踏まえながら準備を整えていったが、参加者の応募受付の対応も含む運営等の受託業者が決まったのが 7 月末。参加者募集を開始したのが 8 月 4 日。イベント開催日までわずか 20 日前のことであった。

参加者の募集期間が短く、SNS による発信のほか、伝手を頼った相談以外に有効な手段を取ることもできず、福和先生に講義をいただくには非常に残念な 22 名 11 組（2 回開催合計）の参加となってしまった。子供向けのイベントとして夏休み中の開催を計画したが、「親と子の」のタイトルの通り、親の同伴を基本としていたことから、平日の開催では親の休みなど都合がつかず、応募できなかったという声もいただいた。



写真 10 プリンを使った実験の様子

参加された方々からは非常に好評で、福和先生だからこそできる巧みな話術と進行により、身近なお菓子や文房具を使った実験などを、子供も大人も楽しみながら地震の揺れや揺れに強い構造を体験体感し、地震への備えの大切さなどを学ぶことができるイベントとなった。

参加した子供達が笑顔で、そして目を輝かせながらお菓子で実験していたのが印象的であり、いろいろ苦労したことも報われるかなと感じられた。

特に時間的に非常に厳しいタイミングが続いたイベントで、かつ、多くの関係者が初めてで手探りの対応となった。地震本部、気象台、受託事業者間での全体の作業抽出と役割分担の整理も不足しており、講義で使用するお菓子や道具の購入についても後手後手となり、福和先生の意見を受けて当日にも買い出しをすることとなってしまったことは一番の反省であるが、関係者全員が諦めずに対応したことが結果につながっており、福和先生はもちろん、多くの関係者に改めて感謝したい。

なお、本地震実験教室は地震本部と連携したイベントの第一回目ということで、試行的位置付けも兼ねていたが、2024 年度も事業が継続されるということで安心するとともに、ぜひ、47 都道府県での実施を目指して継続していただきたい。

#### 4.9 地震津波ミニ講演会～きみだけの防災ポーチを

\*松井正人

作ろう！～（地震本部との連携②）\*

地震本部との連携については、予算的な影響を受けるものの、当初から複数回の開催を視野に企画を進めており、前回の地震実験教室が終了し、「ぼうさいこくたい」までの一連の大きなイベントが終わった段階、9月中旬から次の企画についての検討が始まった。

当初段階では、実験教室で地震を扱ったので、次は津波を絡めた内容とすること、親と子を対象としたので、次はもう少し年齢層を上げた対象とすることなどが検討されたが、最終的には、講師として招く先生にもよることから、必須条件とはせず、講師（となってくれる方）と十分な検討を行いつつ判断することとし、開催時期については、最大で3回程度開催できることを視野に、11月から12月の実施を目標とした。

地震本部や本庁との調整も終えて、10月初旬には講師選びと講師との調整を開始したが12月に入っても講師が決定できない状況が継続。仮に実施時期は後ろ倒ししたとしても、日程的に開催すら出来なくなる可能性も懸念される危険な状況であった。

このため、福和先生に再度ご登壇いただくことも候補として相談していたところだが、せっかく、横浜で実施するのだから地元の横浜市や神奈川県の方に講師をしていただく方が良いのではないかと、との助言もいただき、横浜国立大学の先生に相談したのが12月に入ってからのことであった。

結果として横浜国立大学において、今回の地震津波ミニ講演会の講師としてお招きした奥村先生をご紹介いただいたが、1月1日には能登半島地震などもあって新年すぐには動くことができず、奥村先生とお会いして、講師について相談して御了承を頂いた時には1月11日となっていた。

奥村先生との初回の打ち合わせでは、双方の意見交換や雑談を通じて、イベントの基本となる防災グッズを用意し、実際に手を動かして自分だけの防災ポーチを作成してもらうワークショップ形式とし、実際に選んだグッズを発表してもらうことで、知識の共有や定着、防災意識の向上を目的とすることがハイテンポで決定。その流れで、開催日は3月3日とすること、対象を小学生以上とすることなども確認された。

難航した上でやっと講師を決定することができたものの、最終的に地震本部や本庁とも調整のうえ開催決定まではさらに時間を要し、1月16日であった。

実験教室での経験があるとはいえ、開催まで1ヶ月

半というのは非常に厳しく、今回も時間に追われながらの作業が続くこととなってしまった。

最初に手掛けたのは、地震本部側で対応する運営委託に関する仕様書と契約に関する調整と対応で、並行して、受託業者が決定した後に速やかに実施しなければならない参加者募集を行うための、開催案内等の資料等の作成を開始した。

契約等の作業は前回の経験の蓄積があったため、特段の問題もなく進めることが出来たが、それでも事業者の特定ができたのが2月初旬であり、事業者が行う参加応募の受付方法等を確認調整のうえ募集案内に反映し、HPへの掲載やSNSへの掲載案の検討なども行って、最終的に募集案内ができたのは2月13日であった。

その後は、参加者の応募を待ちながら少しだけ時間が空くので、その間に台内の若手を中心に奥村先生と防災グッズの購入に関する対応を実施した。

100円ショップは、商品のライフサイクルが早く、同じ商品を20組以上揃えることが難しく、いくつかの商品は一つの店舗で買い占めしても足りずに、汗を流しながら複数の店舗を行脚し、楽しさと苦労同時に味わいながら購入したようである。

時間的に余裕があれば通信販売で購入する方法や店舗に発注する方法もあったかもしれないが、奥村先生としても実際に自分で購入しながら講義のイメージを検討したかったという事情もあり、平日の夜の活動となった。荷物の量もそれなりになることから、夜間にかけて官用車を使っていたこともあり、何事もなく無事に購入作業を終えた報告を受けて安心したことを覚えている。

参加者の募集については、最終抽選となったとしてもできるだけ中学生や小学生の参加を優先することとしていたため、応募の期限を2段階に設定。最初の期日の段階では、定員20名のところ16名（子供の同伴者を含む）となっており、今回も定員割れが頭を掠めた。しかし、气象台近隣の学校へのチラシやポスターの配布や、神奈川県立歴史博物館や最寄駅へのポスターの掲示などが開始されて1週間も経っていなかったことから、横浜市中区にX（旧Twitter）のポストを行なって頂いた他には対策を取れないまま申込期限を迎え、祈るような気持ちで最終の応募状況を確認すると、36名で20組の参加申込があり定員に達して一安心から一転、今度は、36名の参加者と、講師、関係

者、報道機関等が会場に収められるかという問題に直面したが、「ここはもう、なんとかするしかない」と応募者全員に対して参加 OK の返信をすることと判断した。なお、防災グッズについては、予算と時間的に追加が難しいことから、一人に一つではなく、親子で参加される方々には子供だけに配布することでなんとか納めることができた。

会場は非常に手狭ではあったが、奥村先生の熱意も伝わる距離感でもあり、全員 OK とした判断は良かったと信じている。



写真 11 自分の防災ポーチを発表している様子

ミニ講演会そのものは、奥村先生の軽妙なトークと、自分の考えをしっかりと発表することができる小学生の参加者、関係者による各種対応の結果、目的である防災意識をしっかりと高めることができたと考えている。また、新聞 2 社、テレビ局 2 社、のマスコミ取材もあり、それぞれ誌面と時間を割いて報道してもらえた。

今回のイベントは、前回の経験もあったことで全体としては上手くいったといえる。

しかし、台全体として協力・連携する体制や環境づくりができなかったため、担当した職員の業務が輻輳して準備等作業が後手後手になったり、作業分担やその内容について十分に意識合わせができずに措置できなかったりした事項もあったことから、台を上げた取り組みができるよう今後活かしていきたい。

## 5 最後に

今回、関東地震 100 年をキーワードに多くの取り組みを行った。少し欲張りすぎて、あとから振り返っても一つの地方気象台で対応できるようなものではなかったように感じ、反省もしている。しかしながら、ベテラン、若手の職員がそれぞれのノウハウや持ち味

を生かし、積極的に対応したことにより、多くの成果を上げることができた。最も大きい成果は、多くの職員が企画・立案から実行、広報、報告、反省までの一連の仕事を経験できたことではないかと考える。最初から最後まで仕事を経験することによって、上からの指示による仕事だけでなく、自ら発案して仕事をするということの面白さや大変さを感じたのではと考える。この経験は将来の様々な仕事で生きてくるものと確信している。

最後に、本文中でご紹介させて頂いている関係機関の方々、人員や費用等に関してご支援頂いた本庁・管区・他官署の方々、担当者を支援し続けた気象台内の職員、皆さまの積極的なご協力に深く感謝する。また、本報告を作成するにあたり、ご助言頂いた地震火山部の有志の方々にも感謝したい。

(編集担当 長谷川浩)